

# 生心

せんしん

31号 2021年12月28日

生心  
生心  
生心



御風会会報

## 語り、記し次世代へ

御風会 会長 高瀬 衛

相変わらずのコロナ禍、いかがお過ごしでしょうか。ご自愛ください。

御風会会報「洗心」三十一号の発刊にあたりひとことご挨拶申し上げます。前年は記念すべき発刊三十号の節目、御風縁者の皆様から永年のご指導、ご寄稿を賜り、御風顕彰に三十年の時を繋いでまいりました。会報「洗心」発行の機運を盛り上げたのは、昭和五十七年、相馬御風生誕百周年記念事業が盛大に開催され、その後、熱気盛んな実行委員会が御風顕彰の灯をさらにもともし続けようと、もう一つ加勢した成果だと思えます。創刊号(平成三年五月)には初代会長の永野敏郎氏は、御風会は「御風研究の発表の場」と記されています。いまここに、会報「洗心」を繙くと、御風氏長女、文子様をはじめとし、あまねく全国多数の縁者の皆様からの寄稿で紙面構成されています。

記念の十号誌には「御風の求めていた道を求め互いに研鑽しよう」と意を新たにし、また、「糸魚川市も第二次糸魚川市総合計画後期基本計画」の中で相馬御風の顕彰を位置づけ、教育委員会では「いといがわく小学校社会科副読本」の中で御風のことを「ふるさとの文人相馬御風」として子どもたちに紹介し始めました。特に次代を担う児童、生徒たちに顕彰の意を発信しています。

郷土に文人相馬御風を語る人や、寄稿者も高齢化し、鬼籍に入る人も目立つようになってきました。それゆえに、語り継ぐ人の言葉を記録し、後世に伝えねばなりません。特定の人、特定の御風崇拜運動でなく、御風の人としての生き様、人としての有り様を大いに学び、郷土の宝として、さらに顕彰の意を注ぐ決意であります。

先般、第十四回相馬御風ふるさと俳句大会が開催され、大変多くの投句が全国から寄せられました。先達のみなさまのご労苦が実を結び、御風顕彰と郷土愛を培う伝統行事に成長しました。短歌と輪番で毎年開催し、ふるさとの自然をたたえ愛した相馬御風をあらためて顕彰しています。

各位の益々のご指導をお願い申し上げます。洗心の意を継いでいきたいと念じております。



令和3年11月20日開催  
第14回相馬御風顕彰ふるさと俳句大会  
御風賞、優秀賞受賞者 記念撮影

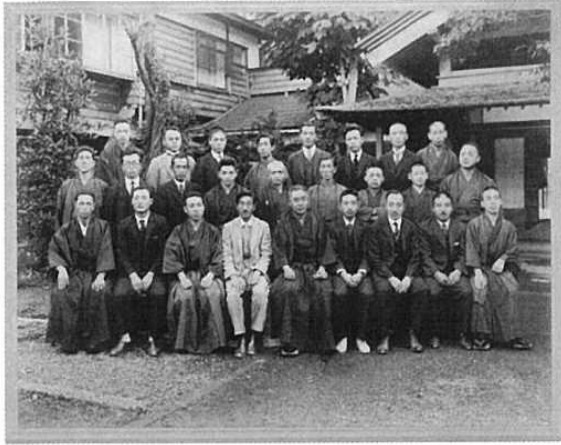
## 「木かげ会」百年の歩み

堀口 良作

相馬御風は、大正五年(一九一六)二月に「還元録」を春陽堂より出版し、三月一日、一家を挙げて糸魚川に退住した。郷里退住当初は、明治四十四年の大火の類焼のため住居は仮屋住まいの状態であった。父徳治郎は多年公事に奔走し、資産はほとんどなく家を顧みることはなかった。そんな状態から糸魚川での一家の生活の出発は多難な事であったとおもわれる。

そんな状況の中において木かげ会は大正五年(一九一六)六月に相馬御風と郷里の知人、松野泰助等の有志が「木陰会」という短歌会を創設した。その規約には「相馬御風先生に師事し、短歌道に精進するもの」となっている。歌は「相馬先生の厳選と添削とを経たるものに限る」とあり、相馬御風の強い影響のある短歌会であった。

「木陰会」発会記念写真には、御風亡き後「木かげ会」を再開する若き日の伊藤正三氏や、再開に尽力した人の顔も確認される。初期の歌会は詠草を持ち寄り、それぞれの歌に対しての意見、批評をして、最後に御風が総評し書記が清書したとの事。それを歌会の記録としてまとめ回覧したと聞いている。その後ガリ版刷りとなり部数を整える事が出来るようになった。木かげ会の資料には、大正十年(一九二一)の歌会のガリ版刷りの記録が残って



「木かげ会」第一回総会  
(昭和3年10月)

昭和三三年(一九二八)四月に「木陰会」の名称の下に短歌結社を起し、発表機関誌として「木陰歌集」を創刊した。以来毎号に短歌大会および歌論を発表する。八月十九日に大町から寺町にかけて一八八棟を焼失する大火に見舞われた。御風宅も土蔵一棟を残し類焼し良寛をはじめとする研究資料、家財すべてが灰となった。そんな状況の中、十月二十七日第一回「木陰会」総会を開催した。総会の記録によると出席者は相馬御風以下二七名。中村慶三郎(後の高知大学学長) 小和田毅夫(皇后祖父)等そうそうたるメンバーによる会議であった。また御風の寄稿によると十一月二七日には未完成ながら再建された自宅に転居したかげには、木かげの会員の多くの尽力があったとのことである。

昭和八年(一九三三)五月号からは、「月刊歌誌木かげ」に変わり、昭和十二年(一九三七)からは、「木かげ」となった。第二次世界大戦の紙不足のために昭和十七年(一九四二)「木かげ」六月号をもって十五年続いた歌集は廃刊となった。御風自身七月には盲腸炎、そして療養と体調も優れず木陰会も解散した。そして、会員の短歌の詠草は「野を歩む者」の「木かげ集」に吸収された。

昭和二十五年(一九五〇)春頃より気分爽快の日が続く「野を歩む者」九十号の編集発行をしたが、これが最後となり五月八日永眠六十七歳であった。

その後、「木陰会」の元会員が相馬御風の短歌文化の灯りを消してはならないと伊藤正三氏の元に集まった。幾度かの会合を開き、昭和三十六年(一九六一)伊藤正三氏を会長とし新生「木かげ会」を立ち上げ月刊の短歌誌「木かげ」を復刊した。以来六十年、本年は「木かげ会六十周年記念歌集」の上梓に向けて編集作業の真ただ中である。

一九七〇年代に北は北海道、南は九州に各支部があり購読会員を含め百名を数えた。現在、会員の高齢化、趣味の多様化に伴い減少の一途をたどっているのが現状である。

「木かげ」に掲載した会員の詠んだ短歌です。吟味して頂ければと思います。

幼抱き厨に語る息の口に

好物入るるむかしのやうに

北海道 小倉 祥子

長雨は術後の身には適せしかな

回復ゆっくり瘦身に優し

高崎 井野 紀元

さわやかな秋風身にうけ菜園に

大根日に日に大きく育つ

埼玉 小沼 復子

コンビニもカード払ひの人の増え

気おくれしつづ財布を開く

埼玉 村山 カズ

剪定の枝をば燃やす切り口の

泡立つ湯気は生命の聖水

東京 潮の恵慈

妻植えし花海棠や花木木

愛しき木々に夏の風吹く

東京 甲村 姫川

あらくさの茂みを分けゆく曾孫の

赤き帽子の見え隠れする

愛知 松尾 忠義

みなぎらふ春の陽あびつつ午後の道

下校の子らの笑顔さやけし  
大阪 大浦 朗子

仮名文字は丸くやさしく和紙に映え

母の遺せし和歌のひとひら  
大阪 松田 裕子

子のもとを終の棲家と去る友の

見馴れし笑顔のまつ毛が光る  
大阪 山村 誠

ゆく秋に見えし櫂のその姿

同じと思えど個々に差があり  
大阪 玉井 広

しら雪の峰の撓たわむに照る月を

一人眺むるやすらぎにあり  
新潟 渡邊 信夫

背をまるめ凍える人を抱き込んで

大糸線はカーブに消える  
糸魚川 加藤 陽子

独り居の妹このごろ父に似て

帰省の日時いく度も聞く  
糸魚川 木下 春子

鈴虫の音と秋風に誘われて

湯上りの髪にコロンを一滴  
糸魚川 原 真弓

行き来する一筋の道ゆづり会ひ

言葉を交わし慈しみあふ  
糸魚川 松田 直子

計るごと身の丈ちじむと笑ふ母

背中に長く積んだものあり  
糸魚川 竹林 歩

急せことも苛いらぐこともうすらぎて

老いの身となるひとりと親し  
糸魚川 大竹 マサエ

甘き香に包まれ蜜柑の木の下の

雑草引く先白き花降る  
糸魚川 秋山 綾子

尋ね来し幼馴染の友二人

話はずきず別れの寂し  
能生 平塚 登志子

六歳と鉢のめだかを数えゆく

「びき・ひき・びき」を充てがいながら  
能生 清水 恵美

どか雪の軒へそろりと若狸

名付けしタヌ子が二晩過ごす  
能生 しみず みさと

目元だけ化粧施しコロナ禍の

マスク付ければ支度整う  
能生 杉の上 むつ子

縁側に座りて写す四世代

それぞれ歩みし時間の中で  
能生 恩田 英子

南部鉄の小さき風鈴涼やかに

澄みし音色の窓に聞く風  
能生 渡辺 喜美江

さざ波のをどる朝の海光り

潮の目深く白を曳きゆく  
能生 真部 旭子

声失くし兄は寝たまま窓を見て

「風はおれの声」一文を書く  
糸魚川 堀口 遼

(良作)

## 御風歌碑第一号の周辺

旗野 博

○はじめに

相馬御風先生に親しく教えを受けた波多野傳八郎先生の『蒲原の文人波多野傳八郎展』が開催されたのは平成7年であった。多くの関係資料が展示された。

中でも注目されたのは「相馬御風歌碑第一号除幕式」の写真である。傳八郎先生の遺品を保全している傳八郎先生の子息<sup>みぎ</sup>盈先生の提供である。五頭山烏帽子岩脇に立つその碑は登山者の多くが目にし、承知していたはずである。筆者は五頭山登り口から約6キロの保田の生まれ。小学校5年生から中学校卒業までの5年間五頭登山があった。以後も登山し10回は登っている。その碑の前を登ったはずであったのにその記憶は全く無い。

平成8年の郷土誌『五頭郷土文化』に盈先生が「歌碑建立の覚え書き」なる一文を掲載され、多くの事実が判明した。以下は判明したことと、その周辺を一文としたもの。

○歌碑は

歌碑は昭和4年9月15日に五頭山烏帽子岩脇に除幕された。新発田新聞は2回にわたり報じている。写真の御風先生の手前の少年が除幕の綱を引いた。少年は4歳、二瓶文和氏

で名付親は御風先生である。文和氏も先年亡くなられ除幕式を知る人はいなくなつた。

この写真は多くを伝えてくれる。当時の山道は木の根や枝を頼りにしただろうに全員が正装。着替えはどうしたのだろうか。御風先生はこの時47歳。伝聞によれば先生は難所は背負われた、とも。

写真には参列者の後ろ、高い所に歌碑が写り、歌碑の後ろに幔幕が黒く帯状に写っている。右の松と思われる大木に貼られた紙は式次第だろうか。これらは準備に余念がなかったことを示している。碑石は御影石。碑面は野面。あの場所で良く格好の石を探したものだ。おそらく御風先生の原稿は筆文字、原紙そのものを石に貼り刻んだと思われる。石工は何日も山に登り刻んだのだろう。平場ならまだしも山の上だ。移動も起こすも道具は限られている。石工の苦勞が偲ばれる。

碑前で式典を終え昼食。下山後、建碑発起人二瓶武爾氏宅大広間で晚餐、歓談。総勢15名。場所を移した青年会主催の歌舞演劇会場は観衆500人余。熱気は盛会となり散会は深夜11時。村を挙げての一大事業であったことがわかる。

○碑の位置

さて碑の位置である。写真提供者の波多野盈先生は小学校の教員をされた。児童の引率がてら20回以上の五頭登山を経験している。

引率時の写真には先述の松の大木が朽ち倒れているものもある。盈先生語るに経年からか歌碑が横たわっているのを目撃している。五頭山頂を背に、烏帽子岩広場を前に、蒲原平野に向かって立てられた、と除幕時の碑の位置を推定した。

平成2年倒れていた歌碑は当時の笹神村と有志の力で当初の位置に近い所に再建された。『五頭郷土文化』誌30号は再建された歌碑が表紙を飾っている。除幕式時の歌碑は一段と高い位置にあったが、再建された歌碑は平坦な土地に据えられている。表紙写真の提供者は後述する出湯集落の川上貞雄氏。



相馬御風歌碑第一号除幕式



採拓中の岡村浩先生

○歌碑の採拓とその後

平成27年7月、歌碑の採拓をと誘われた。仲間15人だ。採拓で山に登ったのは筆者を含め8人。呼び掛けは新潟大学教授の岡村浩先生。烏帽子岩の五頭山頂側に藪状低木に埋もれ碑はあった。なにせ野面の自然石、劣化も激しく採拓は難航した。刻字と野面の凹面が区別し難い。採拓は岡村先生。数枚の採拓で下山した。現場で岡村先生におねだりし、採拓紙2枚を頂けたのは幸いだ。下山後は川上貞雄氏邸で慰労の懇談会、山に登らなかつた仲間が小宴の準備をして待っていてくれた。

岡村先生は別に「越佐文人研究会」を組織し、県内全域を掌握し、埋もれた文人の発掘を続けておられる。機関紙『新潟県文人研究』の採拓時の同誌のあと書きに

「・・・これが特に印象深い。極暑を迎えるほんの一、二日前、片道一時間程の山を上り、御風歌碑第一号となった「ひややけききりにぬれつつ穂すすきの さやくさかちにわれもぬれたり」を採拓。帰山後麓の名勝で大正期当地温泉旅館の草分け・洞春館にお邪魔し、茶会懇親会を開く。参加会員諸氏の平均年齢、高し。よく無事全員が戻れたものと、汗を出し切った面々は笑い合った・・・」

と。この会場が先述した川上貞雄氏の「旧洞春館」である。小宴の床の間には西郷南洲の軸、壁には川上氏採拓の数種の拓軸が吾々を迎えてくれた。

刻まれた詠は

御風

ひやゝけ起

き里尔ぬ礼つゝ

穂須々起の

さや久佐かち尔

わ礼もぬ礼多里

大正十四年九月一日詠む



相馬御風歌碑第一号

手元の昭和16年刊の『出湯温泉沿革誌』(二瓶武爾編)の序文に御風先生は

「・・・大正十四年九月私をはじめて出湯、村杉の両温泉を訪れ、又名高い霊峰五頭に登ったのも休養や探勝の為であるよりも寧ろそこで催された夏季大学に於ける講演の為であった・・・」

と書いている。歌碑はこの時の詠であることがわかる。碑の経年劣化は採拓さえも阻んだ。大切な拓本は残念ながら殆ど読めない。御風先生は歌碑建立を望まなかつた、と聞く。それが建立を承諾し、除幕式に山にまで登ったのだ。関係者の熱意が後押しをしたことは想像がつく。歌碑を継承する吾々はその熱意を再認識せねばならない。

旗野 博 阿賀野市保田

越佐文人研究会員 春城会員

# 公開された木地屋の 蓮華登山「芳名録」

金子 善八郎

一

このほど、大所木地屋の「木地屋の里・民俗資料館」と糸魚川市文化振興課共催で「白馬登山黎明期と木地屋集落」展が、七月二十四日(土)から九月二十六日(日)まで、木地屋の里で開催されることになりました。そしてその展示の一つとして、無料休憩所・小掠立治家に保存されてきた「登山芳名録」が、子孫の小掠裕樹さんによって公開されました。

二

「芳名録」は、大正六年(一九一七)八月十四日から、戦後の昭和二十二年(一九四七)七月二日までの「無料休憩所」の記録です。第一号から第五号まで五分冊になっています。表紙は「昭和五年度／登山芳名録／小掠立治」。用紙は縦の罫紙。はじめに、日付、年月日、そして氏名。所々に登山者の短歌や感想、あるいは、行程や登山の目的なども書かれています。また名刺が貼付されているものもあります。

大正六年四月、休憩所開設四か月前、次のような、郡役所編輯の『日本アルプス／蓮華登山案内』(二十八頁)が発行されています。初めに郡長加賀谷朝蔵の序文。―「大蓮華山」は「眺望景趣に富み、高山植物の多種多様にして学術研究に資すること大いなる」も

のあり。「鉱石の豊富にして無尽の富源」は、越後第一である。しかるに、登山道は、「未だ広く世に知られざるは誠に遺憾とする」。しかして「この紹介は応(まさ)に本郡人士の責任たるべきを想ひ」その実情を「実地の踏査を遂げ」て録したものである。

次は目次。第一編は総説、登山の準備など、第二編は登山の順路など。第三編は余節。高山植物の保護、里程および車馬賃、宿舎など。付録として「西頸城の名勝」親不知、蒲原温泉、月不見の池、など九編。そして巻末八頁は広告。

糸魚川駅前の鉄道院・郡役所指定の「蓮華登山案内所サシモノ屋」、馬車発着所「旅館かんのや」、漆器・蒔絵製造元「小掠立治」、蓮華七湯湯本「丸山彦左衛門」、そして、郡役所指定旅館・蓮華登山案内所の「平岩温泉」など、二十五の店舗・会社の広告が載っています。

三

そして、大正六年八月十四日、無料案内所が開所されました。「芳名録」一頁の次の記録は、その日のことを記しているようです。

次はその見開きの歌。

「金剛杖つきてのぼれる白馬なる

ゆきの蓮華にこころあらはむ 仙卿

・大正六年八月十四日。(第一頁)

西頸城郡長／加賀谷朝次郎

西頸城郡視学／佐藤秀平

北越新聞記者／佐藤萬太郎

糸魚川駅長 / 日向

糸魚川町会議員 / 斎藤政吉

小滝村会議員 / 堀田栄蔵

中村正秀

小掠立治

小滝青年会長 中村賢司

青年会員参拾一名

この郡長「加賀谷朝次郎」の本名は「朝蔵」。別名を記した意味がよく分かりません。しかしここに、郡長以下参会者の名前とその数を記したのは、この日が、無料休憩所開設の「記念の日」だったからで、休憩所の開設も、役所指導の観光開発の一環だったのではないかと考えられます。

四

芳名録にどんな人達の名が記録されているでしょうか。

相馬御風に関係する人達と、その後の活躍で名前が知られるようになった人達を、コメントをつけて掲載順に紹介します。

【第一号】

大正七年七月二十八日。

糸魚川町役場 井合考治郎、松野泰助(「木蔭」発起人、役場吏員)

糸魚川尋常高等小学校

金子健治(「木蔭」編集者)、田木孝治、熊谷広吉、岩崎耕輔。

糸魚川中學校 教諭安岡(不明・以下同じ)

郎、藍野精一(美術の教諭、寺地遺跡の報告書に執筆、考古資料を収集)、大久保( )太郎。

生徒小笠原敏郎、保坂桂司(大野村村長、

北越新聞記者／佐藤萬太郎

糸校教頭)、磯野弥忠治、岩崎航介 (三条の人、元校長山崎良平の推薦、御風身元引受人、結婚の時テル夫人がひすいの指輪を贈る、東大卒、冶金学の権威)、青木重孝 (「木蔭」会員、糸魚川市史編纂) 佐野次夫、藤岡勲、卒業生相澤悦二 (相澤医院)。

高田師範学校 生徒上村義雄、池田。長野師範学校 小林直和、相沢誠二  
富山県師範学校教諭内山教雄。

金沢市第四高等学校生徒 理科生徒。  
・大正十年七月二十七日。

西頸城郡視学 富永長治  
新潟県視学 関威雄

糸魚川高等女学校長 渡部治 (御風と交流)  
今井尋常小学校長 沼野省三

青海村田海小学校訓導 梅澤香康  
糸魚川中學校登山隊 大久保庄太郎、渡辺

克太郎、金沢医専三年相澤悦二、小林百樹、藤井義哉、中村星雄 (中学校長、教育委員)

東京高等師範、東京商科大学、第四高等学校、新潟高等学校。

・大正十三年。  
糸魚川町新屋、第一高等学校生徒松澤誠逸

(御風の従弟松澤善二の長男、東大卒、医師)  
・大正十四年八月二日、八日。

糸魚川中学校、金子健治 (「木蔭」) 佐藤扶桑 (新町大蓮寺住職)

・昭和五年七月二十一日。  
糸魚川中學校安田秀康 (糸魚川市職員、さ

さゆり栽培)、小野正毅 (青海町長)、高野薫

(写真館、教育委員) 細井宗一 (国労委員長)

・昭和六年八月七日、八日。  
糸魚川山岳会水上銃三、林九一郎 (糸魚川町助役)、中村又七郎 (初代糸魚川市長)、月橋正樹 (糸魚川小学校校長)、高野佛一 (「木蔭」会員、この時詠んだ歌) — 「木蔭」より—

・山深きいで湯の宿に足のべて  
声ほがらけき鶯を聞く  
雲の上にもそり立ちたる白馬嶺の  
這松原にもすむ鳥のある

・昭和六年八月三日。  
新潟県知事 黒崎真也  
同 真人

林務課長 安藤時雄  
同 正明

県属 ( )  
県警部 太田徳藏

糸魚川土木派遣所長 斎藤一巳  
糸魚川警察署長 ( )  
糸魚川山岳会 月橋正樹  
高田新聞記者 杉田元二郎

新愛知高田支局記者山崎榮峰  
小滝校長 丸山徳平  
大所区長 吉田徳松  
山岸勲吉  
小掠立治  
小川好司

平岩案内組合長 山岸佐丞  
青年会長 吉田寿吉  
案内人 他 拾壱名

糸魚川中學校安田秀康 (糸魚川市職員、ささゆり栽培)、小野正毅 (青海町長)、高野薫

糸魚川中學校安田秀康 (糸魚川市職員、ささゆり栽培)、小野正毅 (青海町長)、高野薫

糸魚川中學校安田秀康 (糸魚川市職員、ささゆり栽培)、小野正毅 (青海町長)、高野薫

糸魚川中學校安田秀康 (糸魚川市職員、ささゆり栽培)、小野正毅 (青海町長)、高野薫

糸魚川中學校安田秀康 (糸魚川市職員、ささゆり栽培)、小野正毅 (青海町長)、高野薫

糸魚川中學校安田秀康 (糸魚川市職員、ささゆり栽培)、小野正毅 (青海町長)、高野薫

糸魚川中學校安田秀康 (糸魚川市職員、ささゆり栽培)、小野正毅 (青海町長)、高野薫

— 黒崎閣下以下随形式拾八名 —

・昭和六年八月八日。  
糸魚川小学校 月橋正樹外四十二名 西頸城青年会丸山席治 (校長) 外に二十三名

【第二号】  
・昭和七年八月四日。  
中頸城大瀧山岳会飯吉亮一 (糸魚川駅前詩碑「ふるさと」作曲者、旧姓猪又、西海)

・昭和八年七月二十一日。  
糸魚川小学校長月橋正樹外職員九名、高等科児童男生徒七十四名。

【第三号】 (表紙裏の記録)  
「昭和八年七月九日より同七月二十七日まで登山者参百参十六名」  
・昭和八年八月五日。

糸魚川山岳会第五班—白馬—朝日—梅池方面縦走隊 月橋正樹、内山秀猪 (青年学校校長)。キャンプ班—朝日—赤倉—白馬槍縦走予定、酒井正也 (酒井書店) 外八名。

・昭和十年七月二十七日。  
新田池原寿雄 (糸魚川市議議長)。糸魚川小尋常科男子十四名、女子七名 引率月橋正樹。

【第四号】  
・昭和十一年七月二十九日。  
県立糸魚川中學校登山部金子新一郎 (金子健治長男、東大卒、戦死)、見邊圭介 (蓮台寺富井圭介先生、九十八歳、数少ない現存者、

糸魚川中學校安田秀康 (糸魚川市職員、ささゆり栽培)、小野正毅 (青海町長)、高野薫

糸魚川中學校安田秀康 (糸魚川市職員、ささゆり栽培)、小野正毅 (青海町長)、高野薫

糸魚川中學校安田秀康 (糸魚川市職員、ささゆり栽培)、小野正毅 (青海町長)、高野薫

糸魚川中學校安田秀康 (糸魚川市職員、ささゆり栽培)、小野正毅 (青海町長)、高野薫

糸魚川中學校安田秀康 (糸魚川市職員、ささゆり栽培)、小野正毅 (青海町長)、高野薫

糸魚川中學校安田秀康 (糸魚川市職員、ささゆり栽培)、小野正毅 (青海町長)、高野薫

糸魚川中學校安田秀康 (糸魚川市職員、ささゆり栽培)、小野正毅 (青海町長)、高野薫

糸魚川中學校安田秀康 (糸魚川市職員、ささゆり栽培)、小野正毅 (青海町長)、高野薫



高校校長) 畑良次郎(糸魚川高校教諭)。

・昭和十三年七月二十九日。

糸魚川中学校登山部渡辺秀雄(糸魚川中學校長) 斎藤秀偉(斎藤医院) 後藤和三郎(糸魚川校教頭、高校校長)

【第五号】

・昭和十四年七月二十三日。

糸魚川中学校登山部 中村穰(中村又七郎末子) 以上二十九名。

・昭和十五年七月二十八日。

林純雄(糸魚川高等学校校長)

五

記録は、戦中、戦後の三十年間にわたり、その間の利用者、人数も大きく変遷しています。

はじめ殆どなかった学生、学校の「山岳会」などの団体が、次第に多くなり、国、県の役所の人達―営林署、土木事務所など―や、「業者」とおぼしき人、軍人の名前も目立つようになります。

以下は開所から閉所までの利用者数十年ごとの変遷。

・大正七年(一九一八) 六十九人

・昭和三年(一九二八) 百四十四人

・昭和八年(一九三三) 二百三十六人

・昭和十三年(一九三八) 九十八人

・昭和二十二年(一九四七) 七人

開所から十五年目の昭和八年、三百三十六人とピークを迎えました。しかし、日中戦争

が勃発した翌昭和十三年には、三分の一以下になり、記録の最後、戦後の昭和二十二年には、わずか七人になってしまいました。

六

最後に、御風の友人野尻抱影のことを付け加えて置きます。

第一号、大正八年八月十日の記録。

「新潟県糸魚川町 榊芳夫

東京研究社 野尻正英

「中学生」編集部」

この「野尻正英」は、野尻抱影の本名です。当時野尻は雑誌「中学生」の編集部に入っていました。野尻の前の行の名前「榊芳夫」は、どういう人かよく分かりません。しかし、御風記念館に、御風宛ての年賀状が一通ありますので、御風が案内を頼んだ人かもしれません。

野尻が登山に来た大正八年八月は、テル夫人が上京中でした。そして、この月の十三日には四男元雄が亡くなっています。

今まで、野尻が御風を訪ねたのは、学生時代の夏休みと、その後、御風の案内で長者ヶ原遺跡を尋ねて石斧を持ち帰った時だけと考えられていましたが、この名簿の記録によって、その間にも訪れていたことが判明しました。

七

【感想】

・この「芳名録」は、糸魚川の登山史と観光開発の得がたい資料だと思います。

・名簿に「月橋正樹」の名が一番多く記録されています。先生の登山は「教育のため」であったことに感銘を受けました。  
・名簿を読み進んでいて、思はず、私の父と祖父の名を「発見」し、突然、先祖に逢った気がしました。―この感慨は、名簿を見る多くの人に同感されると思います。

(二〇二、八、一五)



木地屋民俗資料館



特別展の様子



芳名録

# 酒造界の神様 江田鎌治郎

榊 正喜

2019年、天皇陛下御即位記念 第34回国民文化祭が新潟県下で開催された。糸魚川・妙高・上越エリアでは、「発酵文化の礎を築いた先人たち」という共通テーマを設定、顕彰すべき人物として、坂口謹一郎、川上善兵衛が候補に挙げられるなか、糸魚川から江田鎌治郎を推挙、功績の周知に貢献できたことがうれしい記憶として残っている。本稿では、江田の功績の概要を改めて示し、御風との関係についても簡単に記しておきたい。

## 一 江田の功績

江田は、その功績の偉大さに比して、一般に知る人は少ない。だが、日本酒の製造工程における酒母の製法の一つ「速醸酛(もと)」を研究、また指導者として全国に技術を普及するなどの業績から「酒聖」「酒造界の大恩人」と称される。現代では、速醸酛は国内の9割以上がこの製法によっているという。

速醸酛が広く普及する以前の日本酒は品質が不安定どころか、雑菌汚染による腐造が頻繁にあり、醸造業は経営を続けること自体が難しい職種であった。近代に入りその解決策が強く求められているなか、政府は明治37年、大蔵省に醸造試験所(現在の独立行政法人酒類総合研究所)を設立、日本酒の品質改良と生産性向上を目指した。日露戦争に突入す

る頃であり、酒税は当時の国税収入トップで国の財政を支える柱。日本酒の研究が大蔵省所管、国策であった理由はこのためである。

当時の酒母製法(生酛系)には、雑菌繁殖を防ぐため、蔵内に住み着く乳酸菌による乳酸生成工程があるのが通常。速醸酛はこの乳酸を人工的に添加することで確実な雑菌繁殖防止と酒母製造日数短縮をねらいとした。醸造試験所の江田がこの方法を研究、体系づけ、普及したことにより全国的に醸造技術と酒の品質が向上、製造コストも削減、さらに現場の労力軽減、効率化にも繋がった。江田は技術指導の先々で感謝されたという。

このような功績から、坂口謹一郎ほどの大人物が江田を「酒造界の神様」と評している。

## 二 御風との関係

◎西頸城郡高等小学校	
糸魚川	二〇
訓導兼校長	二二
同	二九
同	四一
中川直賢	阿部美代
小林次郎	宮信
小宮信	林次郎
阿部美代	林次郎

「新潟県学校職員録」 明治28年4月

(※鎌次郎は誤植)

江田は経歴を教員としてスタートしており、1893年、糸魚川高等小学校に訓導として赴任。校長は当地方に名高き中川直賢。このとき、当時10歳の相馬昌治少年が在籍していた。文系の御風と理系の江田、その後の交流

は不詳だが、江田からの御風宛封書2通(昭和3年大火見舞い、昭和7年妻テル逝去お悔やみ)、年賀状5通が資料館に残されている。

## 略年譜

1872 (明治5) 5月17日、新潟県中頸城郡馬屋村(現在の越市清里区馬屋)の風間忠七の二男として生まれる。  
1893 新潟県尋常師範学校を卒業後、糸魚川高等小学校に訓導として赴任  
1896 能生町尋常高等小学校に校長兼訓導として赴任。当時糸魚川町長であった江田益盛の長女セイと結婚、江田姓となり家督を継ぐ。  
1898 新潟県師範学校附属小学校に訓導として赴任。

1899 東京高等工業学校(東京工業大学の前身) 附設工業教員養成所に進学。  
1901 養成所本科応用化学科卒業後、醸造法専攻のため研究生として在学し翌年卒。

1905 前年設立の大蔵省所管研究機関である醸造試験所に着任。  
1909 速醸酛の開発。日本全国の蔵元に技術指導で飛びまわる。

1929 (昭和4) 醸造試験所退官。大倉恒吉商店(現在の月桂冠株式会社)等の醸造場顧問に招聘。

1933 大阪帝国大学工学部醸造学科講師、江田醸造研究所設立  
1957 5月8日、満84歳で逝去。善道寺江田家の墓に眠る。

「ヒスキ」(ヒスイ)

糸魚川市文化振興課

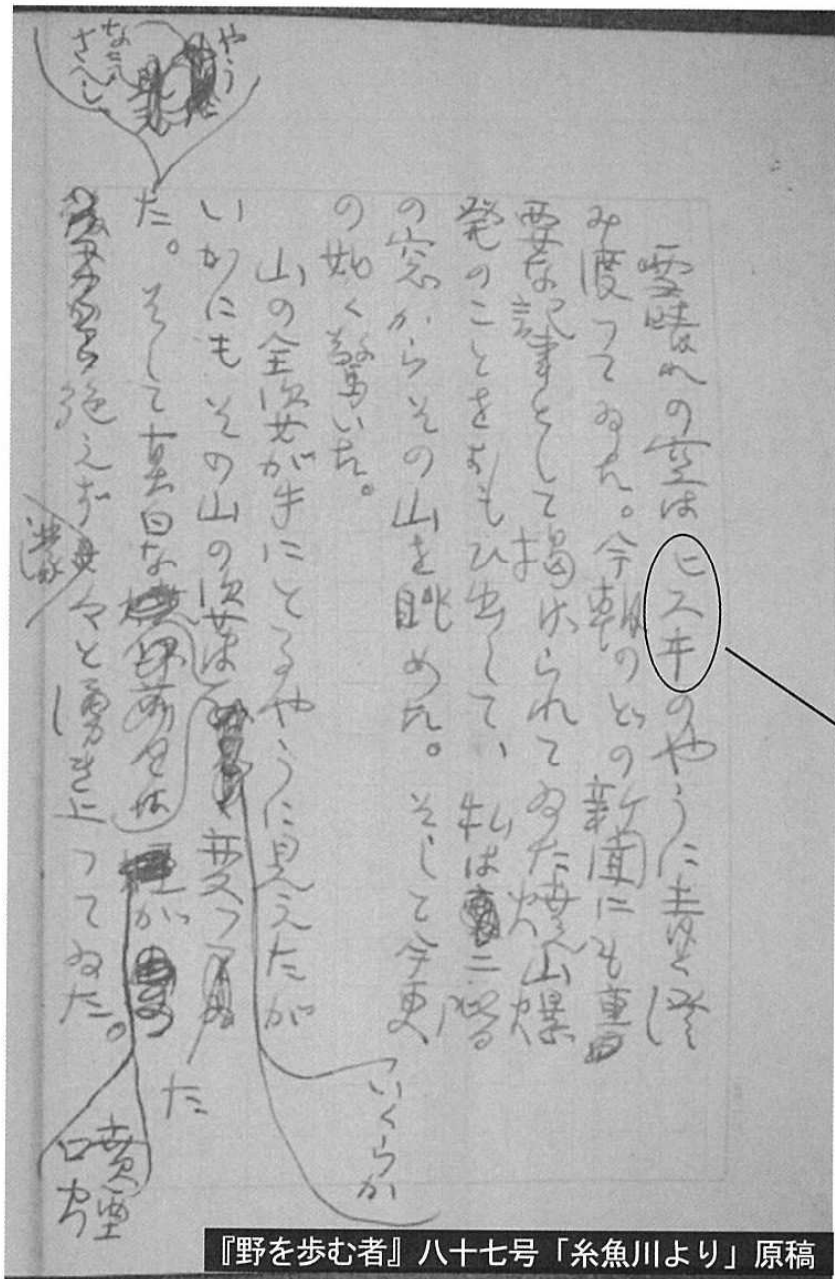
学芸専門員 山岸 洋一

御風の子息皓氏が病気のため入院し、その  
際見舞いに送られた御風の手紙が残されてい  
る。

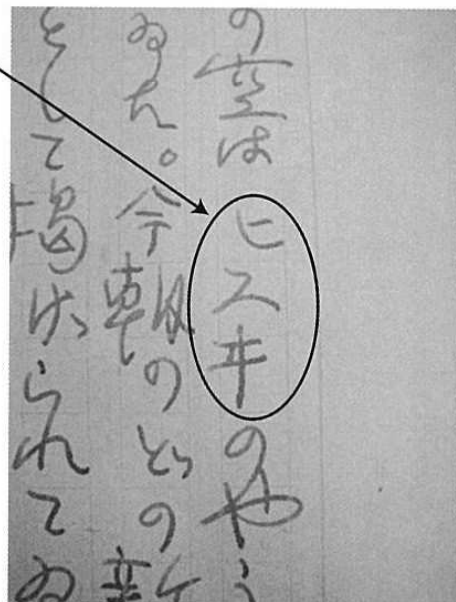
それが、十一月の『野を歩む者』第五十一  
号の刊行と前後しており、興味深い内容が記  
されている。

一九三九年十一月には河野義礼博士の「本  
邦に於ける翡翠の新産出及びその化学的性  
質」が掲載された『岩石礦物礦床学』が刊行  
され、御風資料にこの学術雑誌は含まれてい  
ないものの、小林糸魚川病院長を通じてその  
内容は御風の耳にも伝わっていたことであろ  
うし、前年に引き続き「再調査」を行った  
姫御前・笛吹田地籍での遺跡から出土した遺  
物の内容も不明であるが、「これで決まり  
だ」と文中で記しているのは、ヒスイ原産と  
加工遺跡が当地に共に所在するということに  
尽きるのではないだろうか。ただし、中国の  
彩文土器と、おそらく弥生時代後期から古墳  
時代前期にかけての赤色塗彩の土器を同じ時  
代の所産としたのは、現代の年代観と異なる。  
「雪晴れの空はヒスキのやうに青く澄み渡つ  
てゐた」というのは、相馬御風さんが亡くな  
る一年程前、昭和二十四年二月二十日に記述  
した『野を歩む者』八十七号「糸魚川より」  
の一文である。「糸魚川小唄」で「ヒスキ」が

唄い込まれているが、同じ表記になっている。  
御風さんは河野博士へ送られ分析された「ヒ  
スイ」を見たのであろうか。雪国に住む私た  
ちが、必ずや目にするであろう「雪晴れの澄  
み渡った青空」は、ヒスキの色のようにだと言  
う御風さんの表現、御風さんを「叙情詩人」  
との息女文子さんの評が、生前感じていたこ  
の地の風情について、私たちは同じ感性で受  
け止められるであろうか。なお、御風宅から  
浜へ出て、海岸の石を拾うことについて、  
『野を歩む者』にも記載がある。



『野を歩む者』八十七号「糸魚川より」原稿



## 初めて御風に接した時の感想

若林 陵一

私が糸魚川歴史民俗資料館（相馬御風記念館）に勤め始めて、相馬御風とかかわるようになった頃に興味を持ったこと。これが最初に御風に接した時のイメージ・感想と少なからず共通するであろう。

正直に打ち明けると、私は相馬御風のことをこれまで全く知らなかった。しかし、御風について少しでも勉強しようと思ひ、金子善八郎『新潟県人物小伝 相馬御風』を購読したところ、その多彩な才能①と広い人間関係②を知り、驚かされた。

まず、御風にみられる①多彩な才能について。当館でも、御風は「歌人、詩人、自然主義文学評論家、作詞家、良寛研究者、書家、郷土研究者として活躍した糸魚川の文人です」（常設展冒頭のキャプション）と紹介されている。そのうち私が最も惹きつけられるのは、作詞家としてのすがた、作品が挙げられる。例えば、「春よ来い」などは私のような者でも知っている名曲である。また、「カチューシャの唄」なども耳によく馴染む好きな曲のひとつである。これら名「曲」を作詞したのが「相馬御風」だと知らされた。もう1度歌詞に注意しながら聴いてみたい。そう思った。

さらに、御風が校歌を作詞した早稲田大学や岩手県立黒沢尻北高校などは私の知人たちの母校だが、それはどのような歌なのか。こ

れらも曲だけではなく、歌詞に改めて興味を持つことができた。

一方、②広い人間関係（交友関係）には、金子著書の目次・表題をみただけで、下村千別・真下飛泉・佐佐木信綱・石川啄木・坪内逍遙・島村抱月・大杉栄・北大路魯山人ら有名人の名前があげられる。しかし、私はこれらの人でも名前は聞いたことがあるものの、どんな人か、何をした人かを説明できるような知識はほとんどない。そのような状態なのか、御風と接して私自身「勉強しなければ」と思う人間、課題が多くなった。なお、それでもこれらの人たちは、御風の人間関係のほんのひと握りである。

御風には初対面の頃から度々「もっと勉強しなさい」と言われている気がする。私は当館（＝職場）のすぐ傍に立っている御風像や、なかの事務室前に立っている御風像とよく目が合う。その時にそんな気持ちにさせられるが、恐らく「初めて御風に接した時」の思い（御風先生の①多彩な才能と②広い人間関係への尊敬の念）が今もずっと私の胸のなかにあるからであろう。

## 令和二年度 事業報告

□御風忌・総会 中止

□米吉忌 中止

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため

□会報「洗心」第三〇号発行

令和二年五月八日、六百部

□理事会（一回）

・令和三年五月二十七日 午前十時

□相馬御風顕彰ふるさと短歌大会への協力

賞品提供 児童生徒の部へ図書カード

令和二年十一月二十八日

会場 ヒスイ王国館

【最優秀賞作品】

一般の部

弾正 倭一 様（佐渡市）

日本海の夕日を積んだ金色の

乗り合いバスが岬をまがる

児童・生徒の部

洪澤 姫天 様（糸魚川中学校3年）

梅雨過ぎて風でふわりとカーテンが

丸くふくらみ夏がはじまる

## 《表紙紹介》

自画賛「犬図」

い起能身のいの知とも志可

初春能のあ佐布る雪爾

いぬ古ら者あ所布

御風

## 【編集・発行】

御風会（事務局・相馬御風記念館内）

〒九四一・〇〇五六

新潟県糸魚川市一の宮一―二

電話番号 〇二五（五五二）七四七一